

# 薬剤部

## 訪問

### みやぎ県南中核病院

## 薬剤師の希望で病棟薬剤業務を開始 全病棟に常駐して医師らを支援

みやぎ県南中核病院は、町立大河原病院を前身として2002年に開院した1市3町が運営する二次救急病院。開院当初から薬剤部も24時間365日対応を行っている。また、2005年からは薬剤師が病棟に常駐し、病棟薬剤業務を開始。他職種の負担軽減など、様々な効果を上げている。

### 病棟薬剤業務にいち早く取り組む

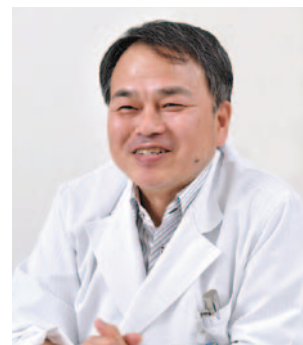
診療報酬に「病棟薬剤業務実施加算」が設定されたのは2012年度改定でのこと。一方、みやぎ県南中核病院はすでに、2005年から薬剤師が病棟薬剤業務を行っている。「薬剤師から出た『チーム医療により貢献するため病棟で仕事がしたい』との希望に対し、院長もその必要性を認めて、循環器内科の病棟から始めました」と語るのは、薬剤部長の佐藤益男氏。

それ以降、薬剤師が病棟に1日8時間常駐するようになると、様々な効果が表れた。「目に見える効果としては、病棟看護師の時間外業務が1ヶ月平均6時間と大幅に削減されま

した。また薬剤師も、直に患者さんと接することでモチベーションが上がり、日常的に医師と接することでスキルの向上もみられました」(佐藤氏)。共に働く医師や看護師などからも病棟薬剤師の有用性を認める声が上がリ、次第に薬剤師が常駐する病棟を増やしていった。

常駐する病棟を増やすには薬剤師の人員増が必要となる。開院当初の薬剤部は9人で「すぐに当直の順番が回ってくるので大変だった」と苦笑する佐藤氏。現在は非常勤1人を含む薬剤師20人、事務員1人にまで拡大している。

佐藤氏は薬剤師の負担軽減のため、医師や看護師へ薬剤の情報を提



みやぎ県南中核病院 薬剤部長

### 佐藤 益男 氏

東北大学薬学部職員、東北大学病院薬剤部を経て、2002年みやぎ県南中核病院開院と同時に同院薬局長。

供するためのデータベースを作成した(図1、2)。薬のオーダーリングシステムからデータを取り込み、それに患者さんへの指導内容などを薬剤師が記録していくもので、このデータベースから必要な情報を出力して医師や看護師に渡すことで、正確で効率的な



3階東病棟のナース・ステーションの一角で打ち合わせをする皮膚科科長の東條玄一 医師(写真右)と薬剤部の熊坂勇宏 薬剤師。

■ 病床数 310床 ■ 職員数 420人(常勤)

■ DPC/PDPS 2006年4月

宮城県柴田郡大河原町字西 38-1

<http://www.southmiyagi-mc.jp/>



